

書 評

宮崎かすみ著『『オスカー・ワイルド』——「犯罪者」にして芸術家——』（筑摩書房、2013）

野田 恵子



1. はじめに

本書は、オスカー・ワイルドの生涯を、彼の作品との関連の中で、時間軸に沿って詳細に描き出すことで、「同性愛をめぐる思想・文化史とワイルドの生涯とが交錯するドラマを描（いた）」（p. v）ワイルドの「評伝」であり、「同性愛」をめぐる思想・文化史でもある。著者は、彼が「書き残した作品のみならず、しゃべり散らかした言葉と、そして彼が生きた人生そのものもひっくるめて彼の作品とみなすべきだ」（p. vi）という観点から、ワイルドの人生を、「同性愛をめぐる思想・文化史」の中に位置づけ読み解こうと試みている。以下では、各章の概要を確認し、本書の論点と意義を考えてみたい。

2. 本書の概要

第一章では、オスカー・ワイルドの生い立ちからオックスフォード大学での学生時代までに焦点を当てることで、彼が、アイルランド出身の無名の青年から「オスカー・ワイルド」になるまでの時代背景や彼を取り巻く環境を考察している。

ワイルドは、高名な医師の父とアイルランド・ナショナリズムに心酔した著名な詩人の母との間に次男として生まれた。プロテスタントの名門パブリック・スクールからアングロ・アイリッシュのエリート層を輩出してきたダブリン大学トリニティ・カレッジに進むというエリート・コースを

歩んだ後、20歳のときにオックスフォード大学へ転学した。「私の人生における二つの大きな転機は、父が私をオックスフォードに送り出したときと、社会が私を監獄に送り込んだときであった」(p. 18)と後にワイルドが述懐しているように、オックスフォード大学での経験が彼を「オスカー・ワイルド」にしたことが、様々な人物との出会いを通して描かれている。目的合理主義的な中産階級の価値観に挑戦するようなワイルドの唯美主義の思想や感性は、古代ギリシャやルネッサンス文化を賞揚するオックスフォード大学で生まれたものだが、その中にはもちろん「ギリシャ的同性愛(男色)」も含まれている。唯美主義とその連続性のなかにある男色の実践が、ワイルドを「芸術家オスカー・ワイルド」にするとともに、彼を監獄へ送る第一歩ともなったことが、本章では示唆されている。

第二章では、ワイルドがロンドンに出てからの活躍とワイルドの人生につきまとう浪費癖による金銭的困窮、また妻コンスタンスとの結婚とその破綻が、彼の男色の実践との関連のなかで描かれている。妻と子どもとの平凡な結婚生活に「死ぬほど退屈」し(p. 62)、道徳の枠の中に収まりきらない、唯美主義者で男色家のワイルドの「芸術家」としての円熟期のはじまりを予感させて本章は終わっている。

第三章は、19世紀に誕生した性科学の言説やワイルドの芸術論を「同性愛」との関連において読み解くとともに、作家として開花しはじめた彼の作品と実生活での男色の実践をお互いの影響関係のなかで考察し、ワイルドの人生を「同性愛」の思想史のなかに位置づけている。また、男同士の性的関係が犯罪化されていた当時のイギリスにおいて、「男色家」＝「犯罪者」として生きることが、彼の芸術や思想の核になり、「芸術家」としての円熟期を支えていたこと、つまりワイルドにとっては、「犯罪者」であることと「芸術家」であることが不可分であったことが、詳細な事実をもとに明らかにされている。

第四章では、劇作家として成功したワイルドが、一方で男娼との享樂的な情事に耽っていた様相が克明に描かれている。享樂的な生き方にどこまでもはまっていきながら、劇作家として絶頂期を迎えていたワイルドの人生を詳細に描写することで、彼が、最終的に中産階級的な規範が支配的な社会において「犯罪者」として糾弾されざるをえなかった事実が説得的に

指摘されている。

第五章では、ワイルドの、男娼を含む複数の若い青年たちとの男色関係が「猥褻行為」として「犯罪」とみなされ、裁判で有罪判決を受けるまでが記述されている。裁判においてワイルドは唯美主義に基づいた自説を語り続けたが、その言説とワイルドを糾弾する中産階級的な価値規範とのコントラストが興味深く描かれている。

第六章から終章では、有罪判決を受け、レディング監獄に収容されたワイルドの悔恨の情や監獄での生活、出所後イギリスに戻ることなくフランスで死を迎えるまでの人生が、家族や友人との関わりなどを中心に考察されている。彼の社会的な死、そしてその後の失意の中での実際の死の意味を問い直し、本書は締めくくられている。

3. 「オスカー・ワイルド」という生き方——「男色」と「同性愛」

本書において著者は、フロイトをめぐる思想史の中で、英文学批評の分野で盛んに論じられていた「変質論（ディジェネレーション）」の思想史に興味を抱くことになったと述べている。そのような関心を背景にした本書は、「ワイルドというゲイのアイコンのような人物の評伝」を変質論との関係のなかに置いて書くこと、つまり「変質論を中心とする同時代の思想史を横糸に、ワイルドの生涯を縦糸に」することで（p.290）、「欧米知識人の思考の根底にあった伝統思想のようなもの」（p.289）と著者が考える「変質論（退廃論・退化論）」へ接近を試みた著作である。

「変質論」とワイルドの人生の接点は、いうまでもなく彼の享乐的で退廃的な生き方とその象徴としての男色の実践にある。本書でも示唆されているが、当時のイギリスでは、享乐的な生き方やそのような生を肯定する思想と男色の実践が不可分のものとして認識されていた。つまり、男色の実践は、キリスト教社会では「罪」の源泉である欲望の肯定であり、その背後には、ギリシャ的な生を賞揚する上層階級の人々や知識人の退廃的な思想が存在すると考えられていたのである。このような享乐的な生き方を「墮落」や「退廃」として社会的な「悪」とみなし社会の周縁に追いやったのは、当時イギリス社会の支配的な価値観となりつつあった「リスpek

タビリティ」とよばれた中産階級の道徳規範である。当時、膨張し続けていた中産階級は、目的合理主義的で、プロテスタント的な価値観を全面に押し出し、自らの道徳を上層階級の退廃的で享樂的な生き方よりも優れたものだとみなした。

このような対立は、ワイルドのような享樂的な人生の背後にあるギリシャ的な思想と中産階級の生き方を支えるプロテスタント的な思想の対決と言い換えることができるかもしれない。本書でも紹介されている性科学は、男色を行う男性のなかに、ギリシャ的な男色では把握できない、生まれながらに同性に性愛の対象が向かう個人がいることを指摘し、そのような人々を「同性愛者」と名づけ、「自然」が生み出した存在として位置づけた。そのようにまなざされることで、「同性愛者」は、不特定多数の男性と関係を結ぶ享樂的な人物ではなく、性愛の対象が同性に向かうことを除けば、「異性愛者」と同じようにひとりの個人と真剣な関係を結ぶひとつの性愛のありようとして、中産階級の性規範のなかにとりこまれていくことになる。すなわち、性科学の言説によって男同士の性的関係に「男色家」と「同性愛者」という明確な線引きがされることで、後者のみが中産階級的な道徳の内部に回収され、前者は社会においてその存在の場を失っていくことになるのである。

ワイルドは「同性愛者」だから「犯罪者」になったのではない。彼は、男色への耽溺がその一部である、ヘレニズム的な思想に裏打ちされたその退廃的で享樂的な生そのものを問題視され、中産階級的価値観が支配的な社会において社会的に抹殺されたのである。ワイルドは出所後、「俗っぽい快樂の飽くなき追求、驕奢、無感覚なまでの懶惰、流行の追随、その他の人生に対する私の態度全般のことごとくが芸術家としてあるまじきことでした。……感謝の心——私にとっては新鮮な教えでした——と謙遜の精神を学んだからです。私はもう富の豊かさや激しい浪費などを欲してはおりません」(p.235)と述べている。彼の唯美主義の思想や価値観は、ますます支配的になりつつあった中産階級の道徳に打ち勝つことなく、その前にあっけなく打ち砕かれてしまったことがみてとれる。

これ以後、享樂的な男色が社会において自らの存在を肯定する論理は中産階級のプロテスタント的規範のなかで存在する場を喪失し、男だけの閉

塞空間であるパブリック・スクールで生まれオックスフォードなどの大学で花開くとされた、男色を含む上層階級や知識人の男同士の絆は、イギリス社会で懐疑のまなざしをむけられるものへと変わっていくことになる。一方で、性科学の言説で再解釈された「同性愛」は20世紀半ば以降、中産階級の規範のなかに取り込まれることで、いったん病理化されるという経緯がありながらも、少しずつ「解放」への道を歩んでいくことになる。

このようにみたととき、ワイルドの人生は、まさに時代の変容期にあつて、対立する規範や価値観の戦いの場であり、彼の人生は、オックスフォード大学でのギリシャ的男色文化の受容にはじまり、人生の絶頂期から転落まで、時代の精神と文化を体現しているともいえる。その意味において、「評伝」という形式で彼の生涯を詳細に描きだした本書は、当時の時代背景（そこで何が問題とされ、どのように認識されていたのか）を検証するためにも意義のあるものであるといえるだろう。

4. おわりに

オスカー・ワイルドの生涯をこれほどの射程をもって描いた「評伝」は、日本では他になく、本書はワイルドの「評伝」として、オスカー・ワイルド研究やセクシュアリティ研究のみならず、思想史や文化史など様々な研究分野に重要な貢献を果たすものであろう。著者は一次資料にあたりながら、ワイルドの生涯の詳細な事実を描き出すことで、これまで語られることの少なかった彼の人生の一側面、そしてその意味や含意を明らかにしている。著者も指摘するように、「オスカー・ワイルド」というと、とかく「ゲイのアイコン」や「耽美主義の芸術家」として一面的な語りがされがちであるが、彼の思想や芸術を、ひとりの人間としての彼の生々しい生涯のなかで捉え直すことで、新たなワイルドの姿が見えるだけでなく、彼の人生がもった意味や含意を再検証することができるはずである。本書はそのような試みの端緒であるといえる。

「変質論」を中心とする思想・文化史への興味を背景にした「評伝」である本書は、主にワイルドをめぐる言説を取り扱っているが、大きな時代の変容期の中にあつた当時のイギリスにおける階級、フェミニズム、家

族、大衆メディア、近代警察など、言説空間の外にある、社会的・歴史的背景とのつながりのなかに、ワイルドという存在をめぐって織りなされる言説を位置づけることで、本書の開示した視点をさらに深めることができるだろう。